

越前の近世を解き明かす「小島家文書」の魅力

教育地域科学部社会系教育講座准教授

長谷川 裕 子

はせがわ・やすこ

小島家文書は、1972年4月以来、1976年8月、1989年5月、1997年1月の4度にわたり、小島家当主の小島武郎氏によって福井大学附属図書館に寄託され、さらに2001年1月には三国郷土資料館保管分の追加寄託を受け、2012年2月7日に武郎氏の次男の小島章宏氏によって寄贈された文書群である。総点数6000点を超える膨大な文書群で、時代的にも近世中・後期を中心に、江戸時代初期から昭和初期までの長期にわたっている。

文書を伝えた小島家は、江戸時代には越前国坂井郡野中村（現坂井市三国町野中）の庄屋を務めるとともに、野中村とその周辺村で構成された「野中組」

（年貢納入等のための支配単位）を管掌する大庄屋に任じられていた。小島家の由緒書によれば、豊臣秀吉が行った太閤検地の際に、「居屋敷壱反歩」が諸税免除とされた上、「小八木理兵衛」の名前、「乗鞍（乗馬）・帯刀」が許され、さらに結城秀康の越前入部の際には、「^{きんりょう}斤量」「^{おさめす}納舛」「^{てぐざり}手鎖」を渡されて、「^の往古之通」（従来どおり）村々の年貢上納の一切を任されたという。後年に作成された由緒書であるため断定はできないものの、小島家が地域の有力者として古くよりこの地に根を張っていた様子をうかがうことができよう。

そんな小島家に伝来した小島家文書の魅力は、な



小島家石碑



貞享 3 (1686) 年「野中村年貢割付状」(No.1227)

んといってもその内容の豊富さにある。まず一つは、小島家文書の3分の1を占める貢租関係の文書である。小島家が居を構えていた野中村周辺は、古くは奈良の東大寺や興福寺の荘園が数多く設置されるなど、越前平野の北西に位置する北陸の一大穀倉地帯であり、江戸時代においても福井藩の財政上重視された地域であった。小島家文書には、野中村はもちろん、大庄屋として実務を担った周辺村の村明細帳や宗門人別帳などの基本帳簿をはじめとして、年貢割付貢状や勘定・収納関係帳簿など、福井藩による村支配の仕組みや、村および「組」単位での年貢収納実務の具体像、大庄屋の役割などを解き明かす基本史料が多数現存しており、越前平野の近世を語る上で欠かせないものとなっている。またこの地域は、兵庫川の右岸に位置し、九頭竜川・三国湊に隣接しているため、米などの物資輸送に関する文書など、従来あまり注目されてこなかった内容のものも多く含まれている。川をめぐる治水や用水に関わる問題・争論に関する文書も散見され、近世の百姓が抱えていたトラブルや、それにとまなう周囲の人々のさまざまな動向（対立の構図や調停の方法など）を生々しく浮かび上がらせている。

さらに興味深いのは、近世百姓の生業や生活・娯楽に関わる文書である。災害・飢饉に際して百姓が要求した夫食米の支給・配分に関する帳簿や、飢饉に耐えうる農業生産の安定化をめざして、農作業の時期や具体的な方法などを書き留めた農業日記には、現代に比べてはるかに生存条件が厳しかった近世社会のなかで生き残るための知恵が詰まっている。当時の人々だけでなく、現代の私たちが学ぶところも多いのではないだろうか。また厳しい社会にあっても、人々は生活のなかに娯楽を忘れてはいない。「禁じられた遊び」であった博奕で処罰される若者もなかにはいるが、江戸時代に流行した「お伊勢参り」の記録をみると、一生に一度の大旅行を存分に楽しむ百姓の姿や、村の一大行事としての伊勢参拝の様相が克明に伝わってくる。

このように、越前のみならず、広く近世史研究全体の進展に資する魅力的な素材を数多く提供する小島家文書は、現在インターネット上に開設された福井大学電子図書館において全点閲覧可能となっている (<http://www.flb.u-fukui.ac.jp/degital.html>)。

ぜひ多くの人にご利用いただき、越前近世史の「謎解き」に参加していただきたい。



天保 5 (1834) 年「農業諸事日記帳」(No.508)